

安成通信 2018/04/03 桜と年度の変わり目と



<さまざまのこと思い出す桜かな> 芭蕉

今年の桜は早く咲き、早くも散りかけています。京都市内では、咲き始めたのは3月22日前後、満開は28日前後、平年より10日近くも早めでした。この冬は寒かったのになぜ？とと思っている人も多いかもしれません。確かにこの冬は久々の寒冬で、日本海側は各地で大雪でした。気温も下に添付した図に示すように、西日本は12-2月を通して（5日平均でも）平年より2~3℃低い時期が続いていました。ただ2月末から急に気温が上がりました。このような気温の推移は、実は桜の開花を一番促すようです。桜の開花には冬の寒さが必要です。冬の寒さは、桜のつぼみの「休眠打破」を強め、その後の高温が早めの開花につながったようです。（昨年の安成通信 2017/04/23「桜を感じる季節変化と気候変化」参照）

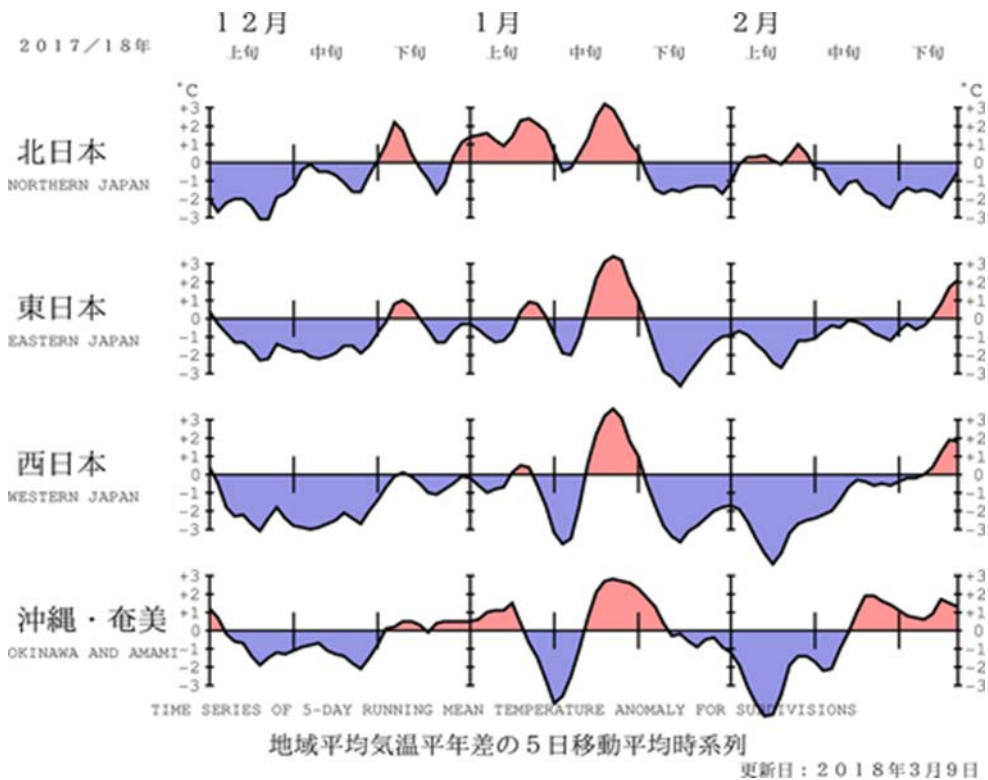
さて、3月から4月は、別れと出会いの季節、終わりと始まりの季節です。日本は、学校や会社などの事業所の年度も、国の会計年度も、すべて4月から3月の1年が単位になっています。これは、日本の農業の柱である稲作の暦に密接に関係しています。日本の多くの地域での稲作は4月~5月の田植えから始まり、9~10月の稲刈り・収穫で終わります。農家の方々が新米を用意しそれを市場に出して現金にするとほぼ年末になってしまいます。ただ、国が農家の人たちから税金を徴収するには、1月では早すぎるので、会計年度の閉めは、もう少し遅くしないといけない、ということで、明治政府は4月から3月を会計年度とすることを、1886年（明治19年）から始めたようです。会計年度がそうになると、国の予算を使う学校や事業所などもすべてそれに合わせた年度になったわけです。

それにしても、桜の季節が、日本の年度の変わり目の時期と対応したことは、明治以降の日本文化の形成にとって、けっこう意味があったのではないかと感じます。桜が咲く、桜が散るということを、出会いや分かれ、あるいは新たな生活のスタートや、あるいは失敗と結びつけて感じるような精神構造を、日本人は持つようになったのかもしれませんが。確かに、咲くときはパッと咲いて華やかな満開となり、そしてハラハラと花びらを落とし、あるいは花吹雪として風に舞う桜の花は、芭蕉ならずとも、人々を感傷的にする何かを、桜は持っているようです。松尾芭蕉が自らの人生の規範にしていた歌人の西行も詠っています。

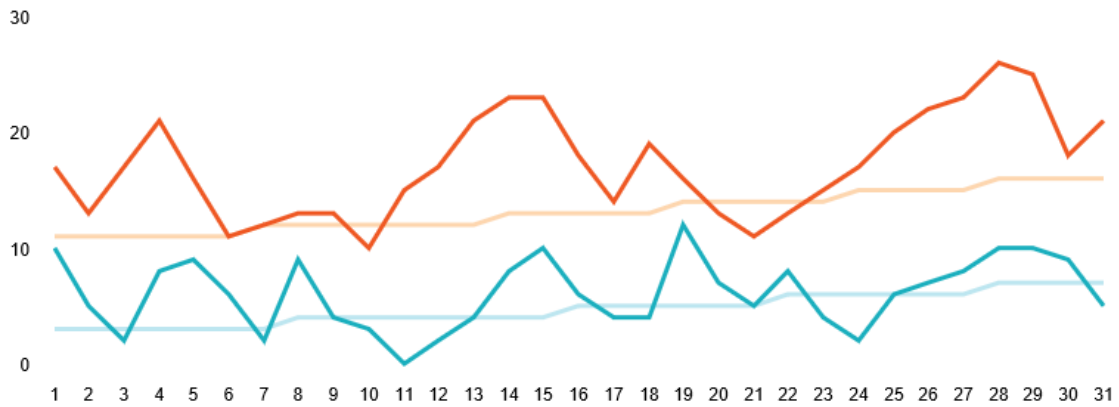
<願わくば 花の下にて春死なん その望月の如月の頃> 西行

参考文献：

- 1) 安成通信 2017/04/23 桜を感じる季節変化と気候変化



2018年冬（12月～2月）の日本全国の気温の推移（気象庁気候系監視報告から）



京都市の2018年3月の最高気温と最低気温の推移

(<https://www.accuweather.com/ja/jp/kyoto-shi/224436/march-weather/224436>)